

# 木村文助研究

通信 8号  
2003・11・1

## 赤い鳥・木村文助コーナー一新

大野町が郷土資料室に「赤い鳥・木村文助」コーナーを設けて満二年を過ぎた。

今年も展示物、写真などパネル化し見やすく一新した。なおこの作業には当ぶんぼけんも全面的に協力した。

札幌市の比良信治氏から札幌の中学校で木村文助に教えを受けたという方で自らまとめた文助研究の冊子が届いた。

道内苫小牧市の木村好氏（父が文助）が今夏家族と共に大野町を訪れ「赤い鳥・木村文助」コーナーを感慨深げに眺めて帰られた。

大野町では教育広報「おおの」を年四回発行し全世界帯に配布している。赤い鳥に載った綴り方（自由画も含め）が昨年一〇月号より連載され、今回は七、一〇月号をまとめて通信に載せた。

当ぶんぼけんでは「村の子供」（文助編著）発刊八〇年を記念し小学生の作文を募集したところ一三八点集まった。

二〇〇三

四・一 連載「赤い鳥に載った大野の作文」

（町教育広報おおの）

四・二四 町郷土資料室「赤い鳥・木村文助」コーナー一新

四・一〇 「赤い鳥」コーナー一部一新（函館新聞）

五・一〇 木村文助「コーナー」資料の一部一新（北海道新聞）

五・一 比良信治氏が「冊子」木村文助の生活綴り方の足跡「寄贈

五・二四 「新・村の子供」発行視野に作文募集（函館新聞）

六・一 大野に根ざした綴り方教育（北海道自治研究会誌）

七・一 連載「赤い鳥に載った大野の作文」（町教育広報おおの）

七・一 ぶんぼけんが「村の子供」発行八〇年記念小学生作文募集

七・一 会員・星野勲氏が「大野小学校創立五〇年」記念帖「寄贈

七・九 大野小昭和三年記念誌発行（函館新聞）

八・一八 苫小牧市木村好氏ほか家族が郷土資料室見学

一〇・一 連載「赤い鳥に載った大野の作文」（町教育広報おおの）

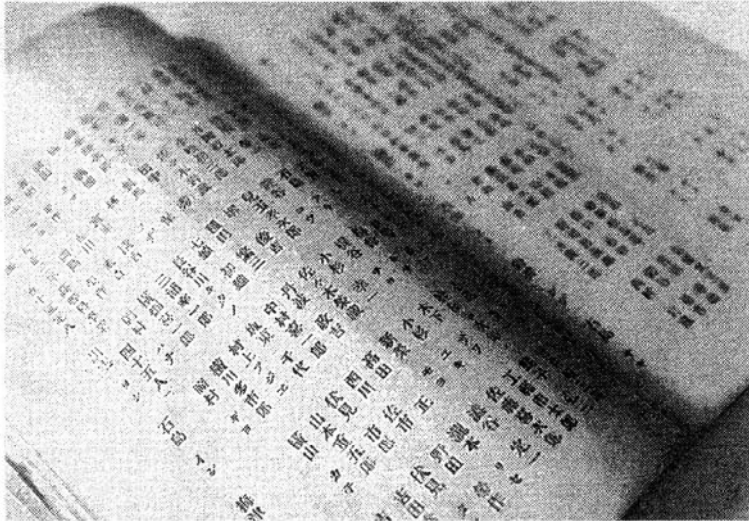
一〇・七 小学生作文一三八点集まる

一〇・一八 平成版「村の子供」刊行へ・文保研（函館新聞）



# 昭和3年出版の記念誌発見

【大野】大野小学校の創立50周年記念誌が見つかった。同校が50周年を迎えた1978(昭和33)年に出版された冊子で、町文化財保護研究会の木下寿実夫会長によると、同校の現存する記念誌としては最も古いという。校長として、児童文芸雑



ページをめくると卒業生や教職員の  
名前などを目にする事ができる

## 木村文助の名も

誌「赤い鳥」へ子供たちの作文を送り、同校の名を全国に知らしめた木村文助(ぶんすけ)11882(明治15)―1953(昭和28)年〓在任時の物で、木下会長は「今後の研究の貴重な資料になる」と話している。

### 大野小創立50周年

### 「研究を裏付ける資料として重要」

同校は1878(明治)舎の新築工事を終え、この11年の開校で、創立50のことも合わせて祝い、周年当時から現在地の町 記念誌を発行したとみられ、内本町にあった。50周年 迎えた年は、前年に校 記念誌は同会会員の星



野敷さん(70)〓函館市松川町〓が今春、自宅で見つけた。星野さんの伯父が50周年当時、同校の教諭を務めていたとい、その荷物の一部が星野さん宅に残されていたとみられている。

記念誌は近日中に町史編纂室へ寄贈され、複写版が同校と町郷土資料室に贈られる。同資料室では木村の足跡をたどる「赤い鳥コーナー」で一般公開するという。

【奥山秀俊】

同校の歩みについては、沿革史や町史などから50周年当時のことも大分、明らかになっており、記念誌からの新たな発見はあまりないという。しかし、木下会長は「これまでの研究を裏付ける資料として重要。これからの研究材料としても役立つはず」と語っている。

見つけた大野小50周年記念誌の表紙

連載

赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーでは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載しています。

赤い鳥には、当時の大野小の木村文助校長が子供たちの作文や絵などを投稿し、次々と入選。「日本一のつづり方学校」と言われました。

今回は、大正十三年（一九二四）一月号の作文「母」（大村いちさん）と、同十五年一月号の自由画（口絵）「野中の家」（伏見薫さん）を紹介します。

母（賞）

大野小高一 大村いち

今から八年前に、父はどうしたのか家を出て行ったきり、もう音も便りもありません。母は、父はどうしたのだろうと、毎日心配していたけれど、何の音もない。そうして私と妹と母と三人、さびしく暮らしていた。祖母さんは心配して、父を毎日尋ねて歩きました。

そのうちに一年二年と経ち、私が尋常二年生になった頃でした。母は「これほど経っても父が帰らないもの、私はこうしてはいられない」と言つて、清川へ嫁に行くことになった。ちょうどその時は本家のお祖母さんの葬式でしたが、母は葬式が済むと、すぐ家へ行って自分のものを出して馬車に積んであった。私はその前から母が行くということがわかっていたので、何も知らない妹は馬車の上に着いて「今、函館に行くんだよ、いち子は連れていかないやあ」と言つて面白がつている。私は妹を見ながら声をふるわせて「ばかだねえ」と言つた。

しばらくすると、母は後ろから「いち子」と呼んだ。私はさ

びしい声で「はい」と言うと、母は自分のはいていた下駄や妹のはいた下駄などを沢山もつて来て「これをお前にくれるから、その下駄が悪くなったらこの下駄をはけよ」と言つて私にくれました。

「それからこれもくれるから」と言つて私によこした。それは十銭銀貨一枚と湯杓二枚でした。

それから、母と妹

と二人馬車に乗った。私は悲しく思いながら馬車の下で見ている。母は馬車に乗つてから「いち子、祖母さんの言うことをきくんだよ」と一言言つたら、馬車はもう歩き出した。私はその馬車が見えなくなるまで見送っていた。

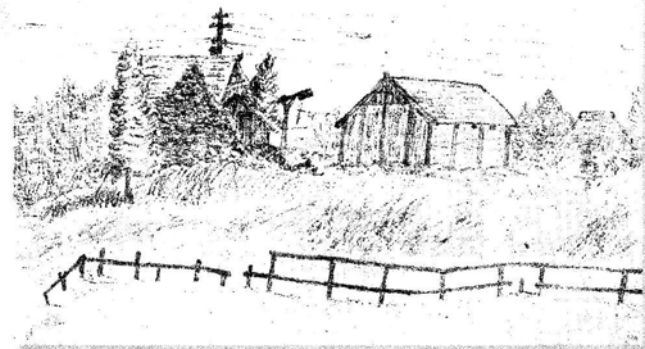
その後は祖母さんに育てられて、今は高等一年にもなったのです。私は何か友達にいじめられても、父母のことを思うと、悲しくなります。

（大正十三年一月号）

ことばの意味

【音もない】音さた、音信がないこと。

【十銭銀貨】明治四年（一八七



野中の家（推奨首席）

大野小尋5 伏見薫（大正15年1月号）

※漢字や仮名遣いは現代風に改めています。わかりにくい表現や方言などは、かつこ書きで補足しました。

す。事実を何のたくみ（たくらみ）もなく簡単にさつさとかいてるのに、非常に悲哀があふれていて、ひとりでのほろりとなつてきます。大村さんも、たった一人のおばあさんのお力になつて骨身をおしまずお手伝いをなさい。やがて幸福が向かって来ます。

自由画選評 山本 鼎

伏見薫君の「野中の家」（推奨首席）は、つつましい、悪い先入主（先入観）のない良い絵だと思いますが、少し弱々しい。しかしトオン（トーン、色調）もあり、形も見てあり、景情もおもしろい。

【湯札】銭湯の入浴券。現在の回数券のようなものです。

綴方選評 鈴木三重吉

大村さんの「母」（入賞）は、年級のわりに、すべての感受が少し単純すぎているとも言えます。併しちがつた（同時に違つた）見方に立つて言うともかく、どこまでもしおらしい、純朴そのままの、いい作で



作文「母」と自由画「野中の家」が載った大正13年1月号と同15年1月号

☆郷土資料室には、文化財保護研究会が収集した史料を展示する「赤い鳥・木村文助コーナー」があります。お気軽にご来室ください。

連載

赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーでは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載しています。

赤い鳥には、当時の大野小の木村文助校長が子供たちの作文や絵などを投稿し、次々と入選。「日本一のつづり方学校」と言われました。

今回は、大正十三年(一九二四)三月号の「栗盗人」(西谷きくえさん)と同年六月号の「身代わりの金」(田島たきさん)の作文二点と、同十五年六月号の「昼休み」(吉田孫七さん)と同九月号の「嫂さん」(角田五郎さん)の自由画二点を紹介します。

栗盗人 (賞)

大野小高一 西谷きくえ

この間、私と弟二人で、栗林に栗を拾いに行くと、何だか栗林が、風のないのに、かさかさするので、「きっと誰かが栗を盗んでいたかも知れない」と言うと、弟たちが「したら静かに行くと、静かに行くと、静かに行くと」と言うので、静かに行くと、私たちを見たのか、人が木からすると下りて来たので、「そら盗人」と私らが叫んで走って行くと、もう垣を破って見えなくなっていました。



たんだあの若者にかけて、拾われてしまった」と言う、弟た

※漢字や仮名遣いは現代風に改めています。わかりにくい表現や方言などは、かつこ書きで補足しました。

ちが「破ったところを垣するべあ」と言ったので、行つて見ると、なんぼ(いくら)むりに潜つたのか、栗が十粒ばかり落ちてあつた。それを拾つて、「きつとまた誰か盗みに来るかもしれなから、かくれて見ているべあ」と言うと、弟たちは「そんな、それもよい」と言つて、栗を食いながら見ていると、男の子が来て垣を潜りましたから「誰だ」と叫ぶと、いくら急いだのか垣を潜つて街道に出た。

昼休み (推奨) 大野小尋五 吉田孫七 (大正十五年六月号)

そうして後ろも向かないで、のめくつたり転んだりして、狂つたように走つて行つた。私たちはそれを見て手をたたいて笑つて家に帰つた。次の日、学校から帰つてから、また三人で栗林に行くと、今度は大きな人が拾っているのので、「誰だ」といふと、その人はうろろろ見てい

た。すると弟たちが「あ、お祖父さんだ」と言つたので、走つて行くと、「お前たち、何じなつていたば」と言われたので、「お祖父さんば、ほかの人だと思つてじなつたんだ」と言ううと、お祖父さんは笑つた。

そうして家に帰る時、「さあ、きくえにかつておごられたし、これから家まで逃げるかな」と言つて、そこらまで走つて家に行つた。(大正十三年三月号)

ことばの意味

【垣を破つて】垣根を壊して。  
【のめくつたり】前に傾いて倒れたりする様。のめる。  
【じなる】「怒鳴る」の方言。

身代わりの金 (賞)

大野小高二 田島たき

私が学校から帰つて家に入ると、何だか、様子がかわつていた。父は草鞋のままで、ふこんで(黙つて)下をうつむいて考へこんでいた。私が入つたので、一寸私の方を見たが、無言でま



赤い鳥10人入選を記念して撮影した写真

た下を向いて溜息をついている。靴をぬいで家上がった。家には祖父と祖母と、父と、父のそばにいる妹のたみと四人、炬を取りまいて、皆心配そうな顔をしている。妹は、誰も物を言わないので、祖父の顔を見たり、父の顔を見たり、きよろきよろしている。

祖母は私を見て、「たきや、たきや。大変なことしたとよ。お父ちや、銭ぐりつと(お金を全部)落としたとよ」と言つた。私はだまって祖母の顔を見て考へた。ぐりつとて、何ほだべとと思うと、「あ、今日は一日だ、給料をみんな落としたのだなあ」と思つたが、だまつていた。父



★郷土資料室には、文化財保護研究会が収集した史料を展示する「赤い鳥」コーナーがあります。お気軽にご来室ください。

は溜息を何度となくしていたが、じつとしていことが出来なくなつたのか家を出て、どこかへ行つた。もう夕飯も近づき、雑倉にいて稲こきをしていた母も来た。汗鍋をかけて、皆戸を取りまいて、父の帰りを待つていた。すると間もなく父も来た。家の人は皆心配にふけり、母は「今年はどうして運の悪い年だべ。春は盗みに遭い、あの位のとねこは死ぬし、また百円余りの金を落とし、何という年だろう」と言う。父は「ああ馬鹿くさい、馬鹿くさい。四十年も経つたども、こんな馬鹿くさい目に遭つたことはない。たしか隠しさ入れたんだやな。こら、こうして、こっそり入れたんだね」と、入れる真似をしている。今年四つになる妹は、父母の心配話を聞いたのか、「お父ちゃ、銭

こ、おらける(私があげる)。おらねだきや(私になら)赤だら(銅銭貨)一ぱいあるし、財布もけるし、何かしたらいがべさ(どうにかしたらいいでしょう)」と言つた。そう言えば言うほど、父は重ねての溜息をつき、「な、たみ。たみの長靴買ってきてける気になつて辛抱していただきや(いたら)、たんだ馬鹿見た」と青ざめた顔でたみを見ている。母は「それでも怪我したより良いと、あきらめないばないなあ」と言つている。祖父は頑固な声で、「どうしてなあ、仕方ない。落としたものもあるもんでもないんだし」と皆を元気にさせた。母は「おら、神様さ行つて聞いてくるやあ」と言つて立つて行つた。私らは、神様が何て言うだろう、もしあの金が手に戻ると言うのだろうかと、もじもじしながら待つていたら、やがて帰つて来た。

行く時、祖母は「気をつけて働け、怪我しないように」と、子供にも言いつけるように言つてやつた。(大正十三年六月号)

■ことばの  
意味  
【草鞋】わらで編んだ履き物。  
【雑倉】雑蔵のこと。雑物を入れたり、作業などをする蔵。  
【汁鍋】みそ汁の鍋。  
【とねこ】当年仔。その年に生まれた仔馬。  
【隠し】ポケット。

綴方選評  
鈴木三重吉

西谷さんの「栗盗人」は、のんびりした村落的な気分が出てるところが面白いです。「そんだ、それもよい」と言つて、かくれるところだの、特にしま



嫂さん(推奨) 大野小尋六 角田五郎 (大正十五年九月号)

いの方で、おじいさんが「これから家まで逃げるかな」と言つて走つて行かれるあたりなどで、ひとりでに微笑まされて来ます。いいユーモア(軽い上品な滑稽)です。純朴なおちついた書きぶり、非常に快い感触です。

田島さんの「身代わりの金」は、ああした際のみんなの気分をよく写し出しています。身代わりの金という意味が一寸人に分らないかも知れませんが、つまりあのお金を落とさなかつたら、その代わりには、何か大怪我でもするようなことが出来わいたのである。お金を落としたのでそういう災難ものがれたのだという意味です。うまいことを言つたものです。そう考え

でもしないと、諦めにくだいしよう。小さい妹さんがお父さまを慰めて「銭こ、おらける」銭私(私があげる)というところは可愛らしくてホロリとします。お母さんが神様に聞いて来ると言つて出て行かれるところなども、短い叙写ながら、そのときの動作や表情までが躍り動いていて、しみじみ気の毒な気がします。



自由画選評 山本 鼎

吉田孫七君の「昼休み」(推奨次席)は、描こうと思つたものが、はつきり頭にあつて、それを現そうとして、一直線に仕事をしていきます。だから、いろいろまづいところはあがるが、生きています。

角田五郎君の「嫂さん」(推奨次席)は、流暢に出来ている。髪がよく出来ている。

※訂正 7月号で紹介した自由画「野中の家」を描いた作者は「伏見薫」とありますが、「伏見馨」の誤りでした。お詫びして訂正します。

◇ 大野に根ざした綴り方教育  
児童文芸誌『赤い鳥』の物語り

夏目漱石門下の童話作家である鈴木三重吉によって大正七年に創刊され、その後昭和期にかけて継続的に刊行された児童文芸誌『赤い鳥』は、大野の文化活動の歴史を語る上でははずせないものである。大野の地から子どもたちの作品を投稿指導した木村文助の一連の取り組みに関わっているからである。

大野町の文化的課題に関する調査研究をはじめ、その他幅広い活動を行っている「大野町文化財保護研究会」（一九七二年設立）による調査の成果によれば、木村文助の生涯および大野との関わりは、およそ以下のものであったという。

明治一五（一八八二）年、秋田県に生まれた木



木村文助

村文助は、明治三五（一九〇二）年に秋田師範学校を卒業した後、県下の各小学校で教職に就き、明治三九（一九〇六）年には二四歳の若さで大館小学校の校長に就任している。教職にあつて文学書に親しみ、特にトルストイの作品を耽読していた。トルストイ本人に教えを受けて帰国した徳富蘆花を訪ね、その際のことを地元紙に掲載しているという。

大正六（一九一七）年、木村は先輩の薦めで渡



『赤い鳥』の入選を記念して

道し、翌年、大野村尋常高等小学校に訓導兼校長として赴任してきた。ちょうどその頃、東京では夏目漱石門下の童話作家鈴木三重吉が主宰する日本初の児童文芸誌『赤い鳥』が創刊された。これは文学、教育など広い分野で画期的な出来事であった。東京での『赤い鳥』創刊の動きに応じて、木村は大野の子どもたちに綴り方教育をすすめた。心の中から出てくる飾らない言葉、生活の言葉を導び、方言もそのまま書く「生活綴り方」を指導して、毎号のように『赤い鳥』に投稿させた。大正一一（一九二二）年八月号では、新栄とよの作品「機」が応募作品約二〇〇〇篇の中から選ばれ、一席で入選した。その後も幾回も入選者を出したことで、大野の学校は全国的にも高い評価を受け、「日本一の綴り方教室」と称されるほどになった。

木村文助が綴り方教育を通じて子どもたちに伝えたかったのは、人間の生き方や社会のことを考える力を養うことであった。それは彼の教育理念であり、人生観でもあったようである。木村は大野を去った後も、道内各地で教育に携わり、昭和二八（一九五三）年に森町で逝去している。

大野町文化財保護研究会では、この優れた教育者に関する調査研究を進めるなかで、事績の発掘、年譜の発行、会報の発行、講演会の開催などを行っている。これらの成果がいつの日か集大成されることを期待するところである。このような地道な活動こそ、地域の文化を物語るものと言えよう。

八州▽

文保研

平成版「村の子供」刊行へ

作品募集に130点

【大野】作文集「村の子供」の発行80年を記念し、大野町文化財保護研究会(木下寿実夫会長)が刊行を予定する「新・村の子供」(仮称)の作品募集に130点が寄せられた。作文集の「平成版」をつくる試みで、木下会長(66)は「予想以上の応募数。出来上がれば二つの時代の子供たちの日常生活や気質の違いなどを比べることができ、非常に楽しみ」と期待を寄せている。

(奥山秀俊)



寄せられた作品。ここから「新・村の子供」が生まれる

現代の生活の様子を後世に

1918(大正7)年などについて吟味をするから28(昭和3)年にかといい、準備が整い次第、大野尋常高等小学校第1冊にまとめる。木下会長は「これだけの作品が寄せられ正直、驚いている。今後、作業を進めながら、現代の子供の文章を後世に伝えたい」と語っている。

1918(大正7)年などについて吟味をするから28(昭和3)年にかといい、準備が整い次第、大野尋常高等小学校第1冊にまとめる。木下会長は「これだけの作品が寄せられ正直、驚いている。今後、作業を進めながら、現代の子供の文章を後世に伝えたい」と語っている。

1918(大正7)年などについて吟味をするから28(昭和3)年にかといい、準備が整い次第、大野尋常高等小学校第1冊にまとめる。木下会長は「これだけの作品が寄せられ正直、驚いている。今後、作業を進めながら、現代の子供の文章を後世に伝えたい」と語っている。

1918(大正7)年などについて吟味をするから28(昭和3)年にかといい、準備が整い次第、大野尋常高等小学校第1冊にまとめる。木下会長は「これだけの作品が寄せられ正直、驚いている。今後、作業を進めながら、現代の子供の文章を後世に伝えたい」と語っている。

下会長は「これだけの作品が寄せられ正直、驚いている。今後、作業を進めながら、現代の子供の文章を後世に伝えたい」と語っている。

資料閲覧(赤い鳥・木村文助コーナー)

「大野町郷土資料室」

町市街地に入り大野小学校の校門を入れて右側、木造の建物です。

〇四一―二二〇一

北海道亀田郡大野町本町二〇〇

TEL (〇二三八) 七七・六六八一

開館：九・〇〇～二二・〇〇

一三・〇〇～一六・〇〇

(町教委社会教育課が対応します)

・休館日もありますので遠方の方は事前に連絡ください

・函館方面↓車で、国道二二七号に入り大野町市街地まで、20～30分。

・道北方面↓車で、国道五号の大沼トンネルを抜け、五分ほどして

大野方向に右折し五分で着きます。



発行

大野町文化財保護研究会

(ぶんぼけん)

〇四一―二二〇一

北海道亀田郡大野町本町六八

会長 木下 寿実夫

(〇二三八) 七七・八五三五